

人口・リプロダクティブヘルス・ジェンダー 2013年10月18日 大隈講堂小講堂

早稲田文化芸術週間 2013 の一環として、男女共同参画推進室では、筑波大学大学院生命環境科学研究科環境ディプロマティックリーダー育成プログラム教授で小児科医師の若杉なおみ先生をお迎えし、「人口・リプロダクティブヘルス・ジェンダー～産む性・育てる性と私の人生～」をテーマとした講演会を開催しました（共催：キャリアセンター、ジェンダー研究所）。

パリのパスツール研究所での免疫学やエイズ等の感染症の臨床研究、JICA や WHO による開発途上国での感染症・エイズ、ジェンダー課題にかかるプロジェクト等、深く幅広いご経験と知見、エビデンスに基づく若杉先生の示唆に富む講演を、学生・教職員等約 160 名が 1 時間半にわたり聴きいりました。

冒頭、齋藤美穂理事より開会挨拶があり、6 年前に男女共同参画推進室ができて以来、毎年、早稲田文化芸術週間には講演会を開催している、WasedaVision150 でも男女共同参画の推進は重要課題に謳われており、“産む性、育てる性は女性だけのことか” という深い問いかけをされる若杉先生の講演会をもてることは非常に意義深い、女性のみならず男性も学び深いお話が聴けましょう、と謝意が述べられました。

ヒトには 6 つの性分類がある、医学・生物学的 4 分類（染色体、性腺、内性器、外性器）、そして社会的文化的 2 分類（ジェンダーアイデンティティ：GID、法律上の性）である。性の未分化症状も見られ、医学の分野では、女性/男性という性分類は、二項対立ではなく連続性がある、男/女という線引きをするジェンダーは、社会文化的言語カテゴリーに過ぎない、とお話が始まり、“性による差異はあるが、優劣ではない” = Different, but Equal. 差異が差別の根拠になってはならない、差異を意識しながらの平等モデルをめざしていくべきだ、と進んで、眼が開かれていきます。

ジェンダーから、人口の問題を考え進めると、人口動態は、「移動」・「移民」と「死亡率」という算定できる要因と、「ジェンダー」（男女の状況）や「リプロダクティブヘルス」（性と生殖）という複雑な要因から成る出生率から規定されており、「人口爆発」と「少子化」という、両極の人口の問題は、ジェンダーやリプロダクティブヘルスの概念と関わっていると解説されました。

「リプロダクティブヘルス&ライツ」（性と生殖の健康とその権利）は、優性思想の歴史においてなされてきた生殖への強制・介入に対する抵抗から提唱されてきたものと核心に入っていました。

「リプロダクティブライツ」は、押しつけられる人口政策に対し、性と生殖に関する事柄を当事者である女性自身が自由な意思で選択・決定し、基本的人権として社会的に保障されることであり、「リプロダクティブヘルス」は、ジェンダー不平等からくる健康への侵害への抵抗として性と生殖への権利を保障することで、健康への侵害の改善を求めていくものであると、概念理解が深まりました。

次に、少子化；ことに日本の少子化の原因とは、“非婚化・晩婚化・晩産化” にあり、子どもを産むのも育てるのも女性という状況を、“男性と女性が共に産む=子どもをつくる主体”、男性も産み育てることのほとんどの部分の責任と権利をもつのだという視座をもって、子育てを楽しんでいこうと説かれました。

さらに、少子化時代にあつての不妊治療から生殖補助医療への動向が紹介され、成功率が低く費用がかさむ生殖補助医療は少子化対策の切り札ではない、女性のエンパワメントや社会進出と出生率は関連があり、先進国においては、女性の労働参加率が高い国のほうが出生率が高いというデータも示されました。

講演の最後は、日本のワーク・ライフ（リプロダクティブライフ）バランスを実現し、働きやすい、産みやすい、育てやすい社会を真剣に追求していきましょう、と結ばれました。

質疑応答では、「なぜ、男女に優劣がつき男性優位の社会になったのか？」という問いには、「男性優位社会がつくられていて納得するために必要だった」と回答があり、「性分類に線は引かれていないと伺ったが、一般の学校教育でふれられないのはなぜなのか？」という問いには、「医学はバリエーションをた



▲豊富な臨床のご経験と医学的・生物学的データをもとに講演をしてくださった、若杉なおみ先生

くさん知っているが、世の中が分けようとするからであろう」と答えが出されました。

講演の締めくくりに、ジェンダーを考えるのは文学や法学分野が主であったが、医学でも考える研究者が増えてきた、医学は、男女は平等であり価値の差異はないと言っていることを知っておいてほしいと、結ばれました。

終了後の感想として、男女が能動的に子どもをつくるのだということを知り、男（親）としての責任をもって人生設計をしなければならないと思う、ジェンダーのみならず、人種、宗教などさまざまな問題について different, but equal. の概念を常にもっていたいと感じた、女性の労働力が上がるほど出生率が上がると知り驚いた、リプロダクティブヘルス、ジェンダーを考える機会は多かったが、それが人口とつながっている認識がもてた、等の声が寄せられました。

